

津山市制施行80周年を迎える今年。新春に市長を交え有識者のお二方に歴史と文化のまちづくり、特に今年完成する新津山洋学資料館の活用について語っていただきました。



小野 淳子さん

山本 博文さん

桑 山市長

**市長** 新年明けましておめでとうございます。

今年2月11日に、市制施行80周年を迎えます。長い歴史と伝統を持つ美作の国津山ですが、振り返ってみますと先人の活躍や努力が歴史のあちこちで見られ、興味深いものがあります。美作の国ができた時代のこと、江戸時代後期の津山藩の宇田川家や箕作家の洋学者の活躍など、さまざまな歴史が思い起こされます。「温故知新」という言葉のとおり、まちづくりは先人の活躍や努力に思いを寄せて、未来を展望するということで実現していくのだと思います。そういう意味で、市制施行80周年の大きな記念事業でもある新津山洋学資料館は、市民が待望して久しかったものです。津山の誇りとして、さらに多くの人に親しんで、愛してもらいたいと思っています。

本日は「歴史と文化のまちづくり」へのご提言をいただくために、お二方にお越しいただいています。まず、子どもたちの思い出や今の津山の印象などについてお聞かせください。

**中心商店街へ行くのが  
楽しみでした**

**山本** 私は上之町の出身ですので、先ほどお話のあった新洋学資料館は、実家のすぐ近くです。子どもたちには、その敷地にあった池で友だちとザリガニ釣りなどをして遊んで

いました。家族そろってお城山（鶴山公園）の動物園に遊びに行ったり、花見をしたり、土曜日の夜は遅くまでお店が開いている「土曜日」に行くのが楽しみでした。

市町村合併して人口も増え、郊外の店舗などは繁盛していると思いますが、中心商店街にだんだん人が来なくなり、活気がなくなって寂しいなと思います。

**ふるさとのシンボルは  
お城山と吉井川**

**小野** 津山は「西の小京都」と呼ばれていたように、家並みが美しい町だったと思います。吉井川とお城山の石垣は、子どもたちから私たちのふるさとのシンボルです。

お城山には折りに触れて上がっており、桜の春、蝉しぐれの夏、石垣を埋め尽くすように咲く彼岸花や北階段から西側の石垣をぐるりと取り囲む紅葉の秋、そして、白とピンクの花びらが散り敷いている山茶花の冬。四季折々に見ることのできる光景がとても好きです。

今は城下町の面影が薄れてしまっただけで、商業と観光のバランスを市全体で考え直している時期だと思っています。城西地区の西寺町は、今も江戸時代の面影を残しています。西小学校の子どもたちが、旧家を回って屋号や暖簾について調べて、それをスケッチブックに描き留めて勉強している